

これは日活無国籍アクションへの 東宝からの挑戦状!

クラシック・シネマ

『狙撃』

脚本に日活無国籍アクションの旗手・永原秀一を、ヒロインに日活のトップ女優・浅丘ルリ子を招き、加山雄三が日活への挑戦状を叩き付けた意欲作。ムーディな演出は失笑ギリギリ。しかし実銃も使ったガンアクションは日本映画史に残る素晴らしさ。

名門華族・安城家の最後の宴…。 戦争直後の日本映画を代表する逸品。

クラシック・シネマ

『安城家の舞踏会』

滝沢修、森雅之、原節子ら伝説的なスターたちの静かな演技合戦は、さながら一流の舞台を見ているような充実感。原節子の想像を超えるダイナミックな行動から染みいるように喪失感が生まれるラストへ向かうクライマックスは映画史に残る!

かつて広島県江田島に 大日本帝国海軍兵学校があった。

クラシック・シネマ

『海軍兵学校物語 あゝ江田島』

江田島にあった「海軍兵学校」に入学した二人の若者の青春を通して、俗に云う“江田島魂”のなんたるかを活写。取材の基に再現した兵学校の生活は見もので、特に食事の仕方には「へえ～」となること間違いなし。昭和30年代の大映映画の十八番「母もの」の要素もあり。

このままでは俺はけだものになってしまう! 三島由紀夫文学を濃厚に映画化。

クラシック・シネマ

『獣の戯れ』

三島由紀夫同名小説の映画化。匂い立つような“女の色香”を発散する若尾文子と、傲慢と哀切を演じ分ける名悪役俳優・河津清三郎が仕掛ける“戯れ”に引きずり込まれる真面目青年を伊藤孝雄が暑苦しく熱演。要所で挿入される若尾文子の“魔性のクローズアップ”は効果絶大。

他人の娘には甘く、自分の娘には厳しく。 矛盾の塊。それが父親。

クラシック・シネマ

『彼岸花』

小津安二郎初のカラー映画。アグファカラーの特異な色彩と小津映画独特の構図の中、娘の結婚を意固地に反対する父親の姿をそこはかとないユーモアの中で点描。佐分利信の貫録溢れる“我が儘”を手玉にする、浪速千栄子と山本富士子の関西弁が耳に心地よく響きます。